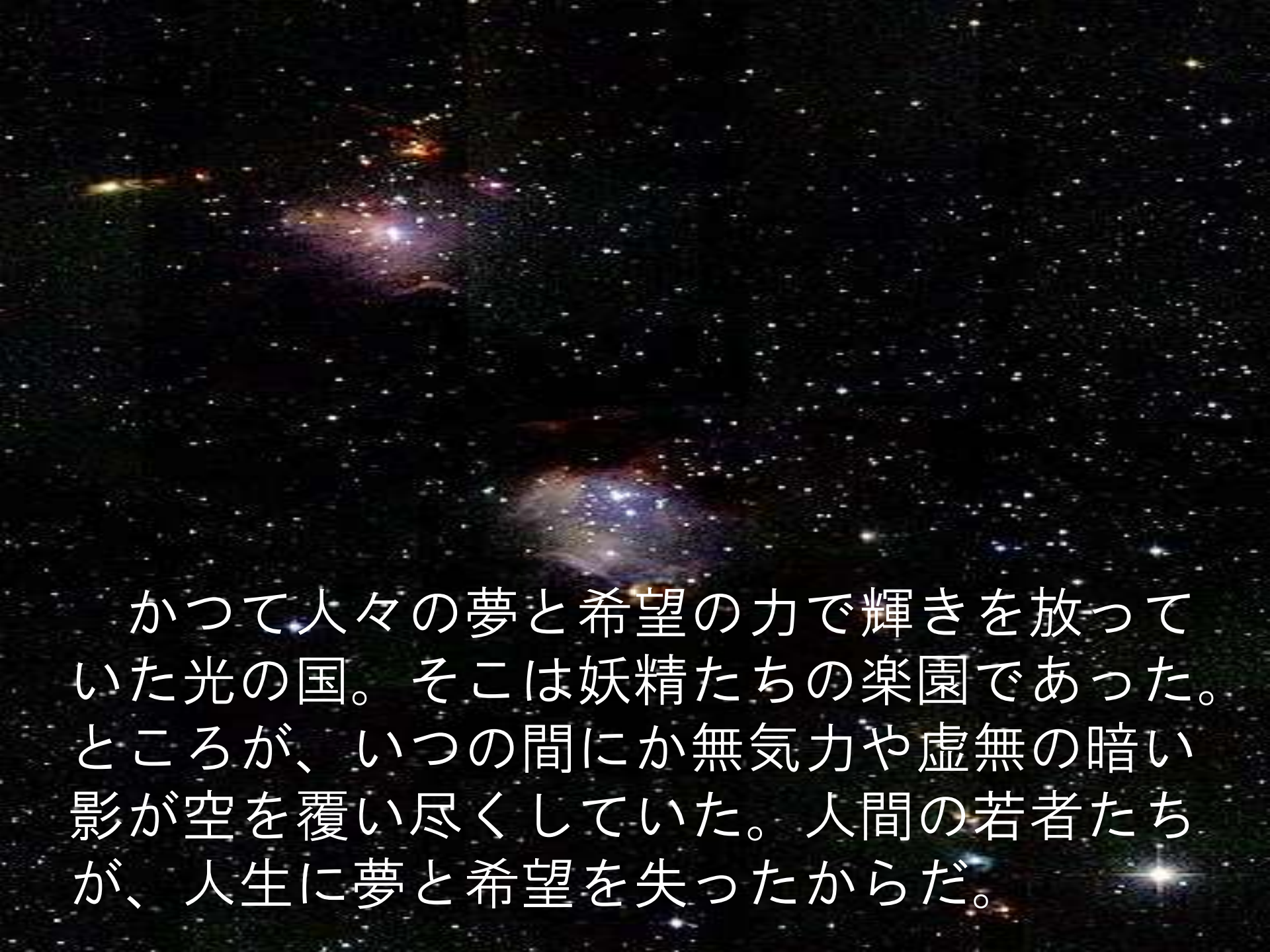


「とんでるず」誕生の秘話




光の国存亡の危機

第1章

A deep space photograph showing a vast field of stars and a prominent nebula with purple and blue hues in the center. The text is overlaid on the lower half of the image.

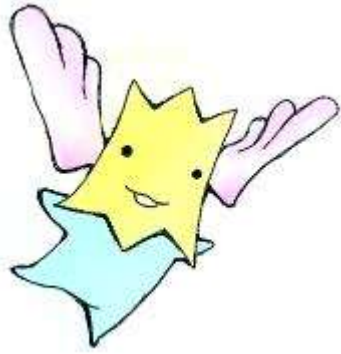
かつて人々の夢と希望の力で輝きを放っていた光の国。そこは妖精たちの楽園であった。ところが、いつの間にか無気力や虚無の暗い影が空を覆い尽くしていた。人間の若者たちが、人生に夢と希望を失ったからだ。



闇に閉ざされた森を
凄まじい寒波が襲い、
草花が枯れ木々が倒れ
てゆく。人間の夢が生
み出した妖精達もエネ
ルギーを失って、一体
また一体と消滅し始め、
光の国は存亡の危機に
陥った。

3人の妖精たち

第2章



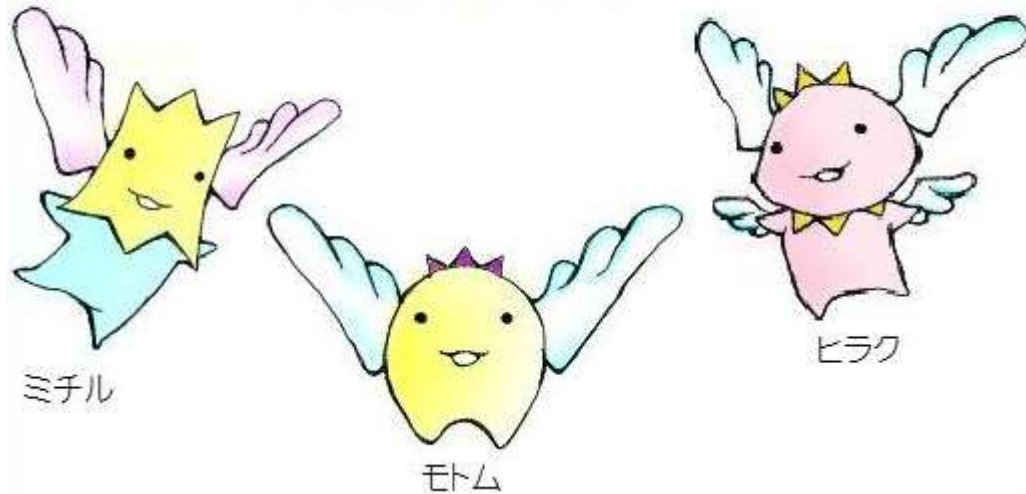
「光の国を救うには、我々が力を貸して人間の若者たちに夢と希望をよみがえらせるしかない」

わずかに残された妖精達は最後の希望を託し、「ミチル」「モトム」「ヒラク」の3人の元気な子どもたちを人間世界に送り出すことになった。



背中に白い翼を持つ彼らは「とんでるず」と名付けられた。森の守り神である大きなクスノキの洞が人間界へ通ずる唯一の道だ。寒空の雲の隙間に、ようやく満月が昇った夜のこと。

とんでるず



「とんでるずよ。おまえたちに妖精と人間の未来がかかっているのじゃ。頼むぞ。」
長老をはじめ、仲間の妖精たちに見送られ、
彼らは人間世界へと飛び込んでいった。
そして……。



猛暑の磐田西高へ

第3章



2009年、8月15日、
快晴。夏休みの静かな
昼下がりに。磐田西高の
生徒昇降口に掲げられ
た双翼の校章が突然キ
ラキラと輝きはじめ、
光の国からの長い旅を
終えた三体の妖精が、
次々と姿を現した！



寒波に襲われている妖精の国から、突然猛暑の磐田西校にやってきた「とんでるず」。暑いのが大の苦手の彼らに容赦なく日差しが照りつけた。

「あちちち。ひょっとしてここが熱帯っていうところ??」

つばめのおじさん

第4章



グロッキー状態の彼らを救ったのは校舎の軒下に巣を作るツバメのおじさんであった。妖精たちがこの世界へやって来たわけを聞いて、子ツバメたちが自立してカラになった巣を「とんでるず」に貸してくれることになったのだ。

「ここは学校とってな、いわば人間の子どもの巣だ。あんたたちが住むにはちょうどいいだろう。秋になったら俺たち夫婦の巣も使ってくれていいよ。」
とおじさん。

「でも僕、知ってるよ。家を借りるのにはお金がいるんでしょ…。」
とモトム。





「何？ツバメに金は関係ないぞ。ただでいいよ、ただで。」

というツバメに、

「おじさん、素敵です。あこがれちゃいます」

ヒラクが躍り上がって喜んだ。

ギブアンドテイク

第5章

ところが、突然ミチルが叫んだ。

「それは違う！経済の鉄則はギブアンドテイク、等価交換だよ。何もしないでもものが手に入るなんて、錬金術にもないんだ。」

ようやく元気を取り戻したモトムとヒラクは黙り込んで、不安な表情でミチルの次の言葉を待った。

**実の商人は、先も立て、
我も立つことを思うない**



「ただし、いい方法がある。
ぼくたちは若者の夢をかなえる
ために、魔法で力を貸すこと
ができるよね。だけど、い
くら妖精相手と云ったって、
何でも無料で手にはいるなん
て思わせたら教育上よくない
よ。だから、願いごと1回に
つき野原の花を一本、依頼料
として頂くってのはどうか
な？」



野の花

第6章



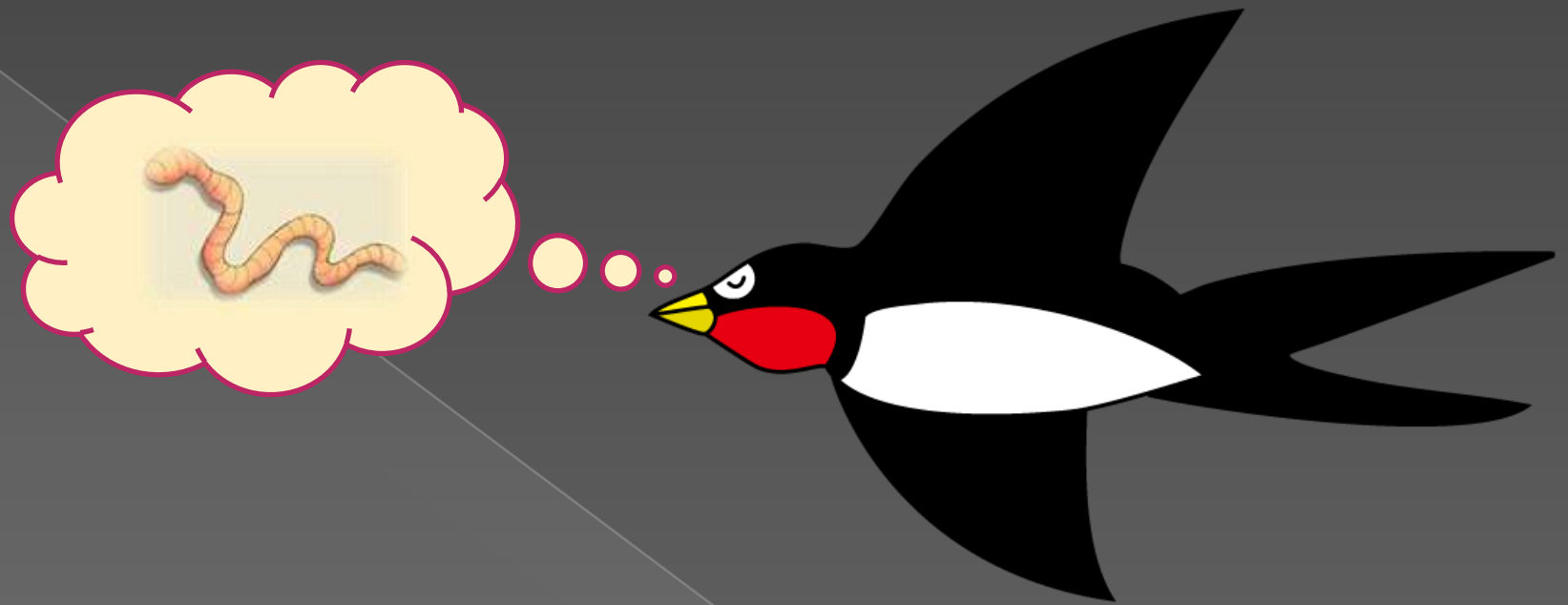
「それをツバメのおじさん
にあげたら……」

モトムの顔が輝いた。

「僕らもおじさんにギブす
るってことになるね。」

ヒラクも納得した。

「頑張れば僕らにだって、
そのくらいのことはできる
ってことか。」



（ええっ？野の花なんて貰うより、ミミズの一匹でももらったほうがありがたいんだけどな）と思ったが、そこは大人。ツバメのおじさんは笑ってうなずいた。

そういう事情で「とんでる
ず」に力を貸してもらうため
には、

「昇降口前の西高歌碑の上に
野の花を置き、心の中で真剣
に願い事を念じること」
となったのだ。



つづく・・・かもしれない・・・のだ